

高い相関を示していた。

(考察) 一般に上顎前歯部の歯軸は、唇側や舌側の上顎骨から歯槽突起移行部に平行していると教えられてきた。しかし記述されている教本は見あたらない。歯軸の取り方についてアラバマ大学のManson-Hingは歯冠とプレグマ(矢状縫合と冠状縫合の交点)を結ぶ線は歯軸と一致すると記述している。これらの方法は全て仮想線であり、目視することはできない。

(まとめ) 当院歯科矯正科受診者156名の頭部X線規格写真から前歯部が正常と思われる新患男女各30名について上顎前歯部の歯軸と相関している部位を検討した結果、鼻背軟組織部と上顎前歯部の歯軸は高い相関が認められた。従って鼻背軟組織部は目視できる歯軸の基準線と言える。

17) 当科における上顎正中過剰埋伏歯の臨床統計的観察

○有馬 哲夫, 加藤 理彦, 河西 敬子, 長谷川良樹
宮下 照展, 高良 孔明, 福山 悦子, 浜田 智弘
小板橋 勉, 倉橋 出, 渋澤 洋子, 金 秀樹
中江 次郎, 高田 訓, 大野 敬
(奥羽大・歯・口腔外科)

(目的) 過剰歯は歯数の異常として日常臨床においてしばしば遭遇する歯数異常疾患であり、特に上顎前歯部に好発する。なかでも上顎正中過剰埋伏歯は、その埋伏状態によっては抜歯に苦慮することも多い。そこで当科において過去3年間に経験した上顎正中過剰埋伏歯48例58歯について臨床統計的観察を行った。

(対象) 2001年9月から2004年8月までの3年間に、当科において抜歯を行った上顎正中過剰埋伏歯48例58歯を対象とした。

(検索項目) 性別・抜歯時の年齢・来院に至った動機および来院経路・埋伏歯の萌出方向・抜歯時のアプローチ方向・麻酔方法・全身麻酔症例における手術時間、以上の8項目について検索を行った。

(結果) 1) 性差は男性31例、女性17例と男性に多く、女性の約1.8倍だった。平均年齢は11.7歳で、年齢層としては7歳が多く、次いで6歳であり、最年少は5歳11か月の男児、最年長は63歳

の女性だった。2) 来院動機として上顎正中過剰埋伏歯が、エックス線写真にて偶然発見されたものが31例・64.6%で半数以上を占めていた。正中離開など歯列不正の診査から発見されたものが14例・29.2%、永久歯萌出遅延により発見されたものは3例・6.2%だった。また来院経路については、開業医からの紹介が37例・77.1%、当院小児歯科からの紹介が7例・14.6%、当院矯正歯科からの紹介が3例・6.2%、残り1例は当科初診となっていた。3) 検索対象である58歯のうち、48歯・82.8%は逆性型、8歯・13.8%が順性型、2歯・3.4%が水平型だった。4) 手術所見よりアプローチ方向を検索したところ、口蓋側から抜歯を行ったものが42例で87.5%を占めており以下、唇側からのアプローチが4例、口蓋側・唇側の両側から抜歯したものは2例であった。5) 全症例の75%にあたる36例は、抜歯を全身麻酔下に施行していた。以下、局所麻酔下に抜歯を施行したものが8例・16.7%、静脈内鎮静法にて抜歯したものは4例・8.3%だった。6) 全身麻酔症例の平均手術時間は38.6分で、16分～30分の間に抜歯した症例が最も多く、最短手術時間は5分、最長手術時間は125分だった。

18) 当科への紹介患者に関する臨床的検討

—第1報—

○小板橋 勉, 菅野 勝也¹, 柴 千裕¹, 丹治 祥大¹
林 昭宏¹, 渡辺 浩秀¹, 加藤 理彦, 河西 敬子
長谷川良樹, 宮下 照展, 高良 孔明, 有馬 哲夫
福山 悦子, 浜田 智弘, 倉橋 出, 渋澤 洋子
金 秀樹, 中江 次郎, 園田 正人, 林 由季
菅沼美野恵, 高田 訓, 大野 敬, 影山 利夫²
橋本 稔²

(奥羽大・歯・口腔外科, 臨床研修¹, 附属病院医事課²)

(目的) 近年、医療界において地域医療連携の必要性がとりざたされている。医療連携の主目的は医療機関相互の連携を強化し、地域住民が安心して受診できる医療ネットワークをつくり上げ、最良の医療を提供することにある。当院は地域歯科医療連携の中心的立場にあり、よりよい医療連携を構築することを目的に、平成12年12月医療連携係が医事課に設置された。以後紹介元医療機関